

---

# 恋愛生活

夢見

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛生活

### 【Nコード】

N9964V

### 【作者名】

夢見

### 【あらすじ】

高校二年の春。地元に戻ってきた悠也を待っていたのは、幼馴染の美優。従姉妹の明菜。同じ学校の先輩の祐希など、個性豊かな女の子たちだった。そんな女の子たちに囲まれ、悠也の生活はどうなってしまうのか！？

不定期更新です。しばらく更新が止まることもあるかもしれません。それでもいい、と言う方のみご覧ください。

ただいま、美優

俺、小日向悠也こひなたゆうやは高校二年の春。下田に戻ってきた。

中学卒業とともに、親の転勤で東京に行くことになった。東京の暮らしを結構楽しかったし、何より便利だったけど、俺にとっては静岡の空気の方が性に合った。

俺が転入することになったのは『私立 風切高等学校』。  
始業式の日、先生に呼ばれるまで俺はB組の廊下で待っていた。

「どうぞ、入って」

先生の呼びかけに、ガラガラと引き戸を開けて教室に入る。クラス全員の視線が自分に向いていると思うと、緊張する。

先生に促され、自己紹介するように言われる。

「え〜っと。小日向悠也と言います。東京から来ました。中学までは下田にいて、一年間親の仕事の都合で東京に行っていました。だから生まれも育ちも下田です。えっと……よろしく願います」

パチ、パチ……とまばらな拍手が起こる。

「悠也！ 久しぶりだな！」

「おう！ 亮！ 一年ぶりだな！ つつかお前もこの高校だったんだな」

「まあな。つつつか、一年間まったく連絡寄こさねえで……友情薄いぜ？」

「ゴメンゴメン。色々忙しくて……」

昼休み。俺に話しかけてきたのは、昔馴染みの香田亮。こうだりょう

小、中と一緒に、東京に行っても連絡すると約束したのだが、まったく音信不通になっちまった。ちよつと悪いことしたかな……

「フン、どうせ東京の暮らしが楽しくて、俺らの事なんて忘れちま

「つたんだろ」

「そんなわけないだろ。……………ゴメン」

「嘘嘘。冗談だって。でも、あいつにも挨拶してやれよ」

「あいつ？」

「井口」

「井口……………って美優<sup>みゆう</sup>か！？ あいつもこの高校なのか！？」

「ああ」

井口美優は俺と亮の昔馴染みで、中学にいた時は、俺と美優はすごく仲が良くて、東京に行くといった時は、泣かせてしまった。最後は納得してくれて、笑顔で送ってくれたけど……

「悠也。井口はC組だ。行こうぜ」

「あ、ああ……………」

美優に会えるのはもちろん、嬉しい。でも、俺はどんな顔をして会えばいいのだろうか。

亮の後に続いて、C組に入ると、……………いた。

教室の一番左後ろ。窓際の席で、友達と談笑していた。セミロングの黒髪に華奢な体。笑うとできるえくぼも、一年前と何ら変わっていないかった。

「井口」

「あ、亮。どうしたの？ 後ろにいるのは、友達？……………」

美優が亮の後ろ。つまり俺の方を覗きこんだとき、ぱっちり眼が合った。

「……………悠也？」

「久しぶり、美優」

俺は少し気まずくなって俯いてしまった。

「悠也。帰ってきたの……………」

「うん。ただいま、美優」

「……………一年、一年間。ずっと、ずっと……………」

美優は俯いたまま、声をくぐもらせている。

まずい！ このままだと、このままだとまた泣かせてしまう。

俺はとっさに美優に駆け寄って、肩を支えるようにする。

「ごめん。ごめん、美優。……………ただいま」

「……………うつ……………つか……………おかえり、悠也」

「えっ、じゃあお前独り暮らしなのか？」

「まあね。気楽でいいよ」

「ちよつと羨ましいね」

帰り道。三人で帰る一年ぶりの帰り道だ。

あの後、美優の友達には、「突然ごめんね」と謝ったら、「全然気にしないで」と言ってくれた。なぜか、とってもニコニコした笑顔とともに。

「東京はどうだった？」

「うん、まあ楽しかったよ」

「やっぱ、空気は汚いのか？」

しばらく俺は2人に東京の出来事をしゃべって聞かせた。

話がひと段落すると、亮が途端にニヤニヤしだした。

「悠也。お前、東京で女つくってないだろうな」

「えっ？ まさか。俺が相手にされるわけないじゃん」

「いや。お前の事だから、悪い女に引っかけたりして、一人大人の階段を上っちまったのかと……」

「……まったく。しょうがないなあ、亮は……ねえ、美優……！？」

美優の方を見ると、大変ご機嫌斜めの様子で、眉をよせてじとじとした眼を俺に向けていた。

「あ、あの、み、美優さん？ 何をそんなに……」

「本当なのね」

「え？」

「本当に、彼女も作ってないし、悪い女に引っかけてもいないのね！？」

すごい剣幕で迫ってくる。

「あ、ああ、っていうか。俺がモテるわけもないんだから、そんな



「ことあるわけないだろ」  
「フン、ならいいのよ」

美優はプイツとそっぽを向いてしまう。

「な、なあ亮。なんで美優あんな怒ってんだ？」  
「……………お前の鈍感ぶりも相変わらずだな」

はあ〜とため息を吐かれました。  
鈍い、だろうか俺は。

「2人とも、この後俺の家にこない？ お土産の浅草の和菓子が  
あるんだけど？」

「ホント!？」

俺のこの台詞に真っ先に反応したのは美優だった。相も変わらず  
の和菓子好きだな。

「ああ、美優和菓子好きだろ？ 浅草と言えば本場だし、喜ぶんじ  
ゃないかと思って」

美優にニコツと笑ってやる。

「……………ずるい」

美優がそっぽを向いて何事が呟いたが、よく聞き取れなかった。

「はぁ。この鈍感天然女たらし野郎が」

後ろでは亮も何事が呟いていた。

ただいま、美優（後書き）

新連載です。何とぞよろしくお願いします。

## 妹 襲来

チュン、チュン……  
ん、朝か……眠い。

結局昨日は、亮と美優と夜遅くまで騒いでいた。宴もたけなわとなり、解散したのが11時。その後、美優を家まで送っていき、その後部屋の掃除をして、風呂に入り結局寝たのは12時だった。

さすがに眠い。

「ん、……んん」

枕元の目覚まし時計を見ると、6:45 起きる予定まであと15分。もう少しベットのの中にいよう。

そう思って寝返りをうつ……うてない。

まるで左腕だけ金縛りにあつたみたいに動かない。いや、それだけでなく俺の左側に何か質量をもったものがあるような……

俺は注意深く左をそっつと向いていくと、

……あどけない顔で眠る従姉妹の姿がそこにはあった。

「あ、明菜!？」

俺はガバツと素っ頓狂な声をあげながら慌てて起き上がった。

「え? むうん……朝?」

俺が起き上がるとパジャマ姿の明菜は目を擦りながら起きてきた。

「あ、お兄ちゃん。一年ぶりだね、おはよう」

そして、満面の笑顔で俺に挨拶するのだった。

遠藤明菜は、俺の母親の妹。つまり叔母の子である。

昔から俺のことを『お兄ちゃん』といい、いつも俺にひついていた記憶がある。

ショートカットの髪に、くりくりの黒目。愛嬌たっぷりの笑顔がトレードマークの女の子だ。

そんな明菜も今年は中学三年生になったはず。以前のようにベタベタするようなことはもうないと思っていたのだが……

「ふん……はあくお兄ちゃんの匂いだあ」

「お、おい。明菜、そんなひつつくなって」

あろうことが明菜は俺に抱きつき、胸のあたりに顔をうずめてきた。こ、これは何とも恥ずかしい。

「ねえ、お兄ちゃん。一年間、寂しかったよ？」

「う、……わ、悪かったよ」

「連絡もないし」

「……ゴメン」

「東京で彼女が出来たのかと思った」

「それはないけど……」

「ならばよし」

いったい何がよいのか、相変わらず明菜は俺にくつついたままだ。そ、それにしても。明菜、成長したなあ。

身長も、昔は俺より頭一個分小さかったのに、半個分くらいまでせまってきたるし……そ、それに他にも女らしいところが色々……い、一年前はこんなに大きくなかった。顔も綺麗になったし……

そんなことを考えつつ、明菜のつむじをみていると、明菜はぱつと顔をあげてきた。俺はそんなことを考えていたせいで、ついそばを向いてしまう。

そんな俺を見た明菜はニヤニヤ笑いを俺に向けると、

「お兄ちゃん、いやらしい事かんがえてたでしょ？」

「うえ！？ い、いや、そんなことはないよ」

「ふふふ、嘘嘘。顔真っ赤だもん、お兄ちゃん」

「ま、マジ？」

「うん。かーわいー」

愛嬌たっぷりにはにかむ明菜を見ると、一番上のボタンが外れたパジャマからはちろちろと白い肌と、た、谷間が……

い、いかん。従姉妹相手に何考えてんだ俺は。  
ブンブンと頭を振って煩惱を追いつまう。

「ねえ、お兄ちゃん」  
「！　ちょ、ちよつと明菜！？」

油断したところに明菜がしだれかかるように抱きついて来て、俺はいつも簡単にベッドに倒されてしまう。

「おかえり、お兄ちゃん。……………ねえ、おかえりのキスしてあげる」  
「ええ！！　い、いやそれは、さすがにまずいって！」  
「いいからいいから。ふふ、おにいちゃん」

とろんとした目をした童顔が降りてきて、俺は身動きが取れなくなってしまった。

どんどん明菜の顔がせまってくる。や、やばい。逃げられない！

ちゅっ

明菜は可愛い音を立てて俺にキスをした。……………ほっぺに。

「あ……………」  
「へへ。キスしちゃった」

俺はしばし呆然としていたが、はつと我にかえる。

そりゃあそうだ。いくら明菜でもそう簡単に唇にキスはしない。俺はほつとするとともに、ちよつと残念な気持ちを抱いていた。

「どうしたの？ お兄ちゃん。こっちのほうがよかった？」

「！ ま、まさか……………」

明菜は俺の唇に人差指をたてて笑った。

い、今。俺、残念って思ったか？ おおおおお、何考えてんだ俺！ ダメだ！ しっかりしろ！！

俺は心の中で少し残念。と思った自分を叱責する。

「つていうか明菜。お前、どうやって部屋に入ってたんだ？」

「どうつて…… 玄関のカギ開いてたよ？」

俺は記憶を掘り返す。美優を送って来て……………確かにそのとき鍵をかけた記憶がない。まったく不用心である。

次からは気をつけよう。そう思っていると、

ガチャ

唐突。唐突に部屋のドアが開いた。

そして、そのドアの陰から顔を出したのは……

「悠也？ 入るよ……………！？」



美優だった。

サアツツツ――――――

俺の顔から血の気が引く。

美優はなぜか昔から、明菜と仲が悪い。

そして今の状況

ベッドの上で仰向けの俺。

その上にまたがる明菜。

部屋の入り口でそれを目撃した美優。

ああ、死んだな。そう、美優は昔から明菜が俺にベタベタすることを快く思っていない。

「おはようございます。美優さん」

「おはよう、明菜ちゃん」

しかし、そんな俺の危惧とは裏腹ににこやかに挨拶を交わす2人。こ、これは……………まさか、俺のいない一年間の間にも2人の関係に変化が

「さて、悠也。パンチとキック。嫌いな方を選ばせてあげる」

あるわけないですよね」

朝の閑静な住宅街に俺の悲鳴が響き渡った。

蹴られた痛みは引かない

「まったく、従姉妹にまで手を出すわけ！ アンタは！」

「ほんと、ゴメンナサイ…………でも、それは誤解…………」

登校中、いまだに痛む右足のすねをさすりながら美優の隣を歩いている。

たいそうご立腹のご様子の姫をどうおさめたものだろうか、俺は頭を悩ませていた。

一メートル程後ろを歩いている亮に目線で助けを求めると、「俺は知らねえ」みたいに目をそらされた。友達甲斐のないやつである。

「明菜ちゃんも、明菜ちゃんよ！ こんなケダモノの布団に忍び込むなんて、危険すぎる！」

ケダモノとはたいそうないわれようである。

「なあ、美優。悪かったって。そろそろ機嫌直してよ。な？ 栗崎屋の栗まんじゅうおごってやるから」

「……………」

「3つ」

「5つ」

「う……………分かったよ。今度の日曜、買いに行こう」

俺が美優の条件にしぶしぶ頷くと、美優はやっと怒った顔を崩し  
てくれた。

「そ。じゃ、今回は許してあげる。今度の日曜、買い物にも付き合  
って」

「え。それは……」

「イヤなの？」

「……いえ。つき合わせていただきます……」

美優のじとつとした眼に俺は頷くことしかできなかった。

「弱いな。お前」

「う。仕方ないじゃないか……」

「結婚したら絶対奥さんの尻に敷かれるタイプだよな」

「……否定できない」

「それにしても、明菜ちゃん。積極的だな…… 私も、もっと積極  
的になった方が……」

「ん？ 美優、何か言った？」

「え！？ いや。なんでもないよ！」  
「……そっか」

何かぶつぶつと呟いていた気がするのだが……気のせいかな？

「それにしても、明菜のやつ、変わったな」

「え？ そう？」

「うん。大人っぽくなったっつうか」

俺がそうだった瞬間、後ろで、亮の「あ、バカ……」という呟きを聞いた気がした。

「ふん。そう。従姉妹の事、そんなえつちな目で見てたんだ」

「うえ！？ いやそういう意味でいったんじゃなくて……」

「じゃあ、どういう意味よ！」

まずい。せっかく美優の機嫌が直ったと思ったのに、また怒らせてしまった。

なんでだ？ 今いち、美優の怒りのポイントが分からない。  
そして俯かれてしまった。

「なによ。私に会った時はそんなこと言ってくれなかったくせに…私だって、胸おつきくなっただから」

結局俺は、美優に機嫌を直してもらった代償に、次の日曜、映画にも付き合うことになってしまった。

昼休み。俺と亮は弁当を持ってC組を訪れていた。朝の件を改めて謝るためでもある。

美優の席へ近づくと、昨日も会った美優の友達がまた談笑していた。

「あ、ども」

「おっす」

俺と亮はそれぞれ声をかけ、それぞれ近づいていく。

「あ、やつほ。小日向君、香田君」

「や」

「こんにちは」

えっと、確か……左のショートカットの活気的な女の子が嵐山涼子さんで、真ん中の茶髪のセミロングの人が弓野杏子さんで、右の眼鏡をかけた委員長が松山信子さんだったかな。

「昨日はごめんね嵐山さん、弓野さん、松山さん」

「あ、もうさっそく覚えてくれたんだ。よろしくね。小日向君」

「ウチらは全然気にしてないよ」

「ちょっとびつくりはしましたけれど……」

もうすでにこの三人は昨日の事は気にしてないみたいだ。

「それにしても。小日向君、美優の幼馴染なんだって？」

「え、うんまあね」

「いつから？」

「家が近くて……幼稚園のころから」

「どうして、東京にいかれてたんですか？」

「親の仕事の都合でね」

が、三人は矢継ぎ早に質問してくる。そんなに俺が珍しい存在なのかな。

と、弓野さんが俺の顔をじっと見つめてくる。う、なんか恥ずかしい。この三人、みんな可愛いんだよねあ

「なるほどね」

「？」

「美優って可愛くて、告白もけっこうされてるはずなのに誰とも付き合わないからおかしいとは思ってたんだけど……………」

「納得ですね」

「男に興味がないのかと思いきや！　その実態は一途に一人の男を思い続けてるんだね」　ふふふ

「ちょ、ちよつと三人とも！　何言ってるのよ！…！」

美優が慌てて三人の口をふさいで、止めようとしてるけど…………無駄じゃないかな。

「ふふふ。美優ったら、顔真つ赤にして、可愛いー！…！」

「なっ！」

「美優。応援してますよ」

「うんうん、がんばれ」

「う、うわああ……………」

美優はすつごく嫌そうな声をだして机につつぶしてしまった。

「ねえ、小日向君！　今、好きな人いる？」

「え？　いや、いないけど……………」

「好きなタイプは？」

「…………特にないかな」

「彼女欲しい願望はないんですか？」

「そりゃあ、いたらいいとは思っけど……………」

何というか…………俺はこの三人の女気に思いつきりあてられてしまったようだ。

俺は昼休み終了の予鈴とともに、三人に笑顔を持って、送られて



しまつた。

## おいしい朝ご飯（前書き）

大っっっっっ変、申し訳ありませんでしたあ！！！！！！（土下座）

いいい、言い訳をさせてください。

ぱ、パソコンがですね。インターネット回線が繋がらなくなりました……

戻った後も、なんやかんやと忙しくて、てがつけられませんでした。

これからも、頑張りますので、どうかよろしく願います。

おいしい朝ご飯

チュン、チュン

ん、朝か……………

ベッドの中でん〜と伸びをする。

はっ！

俺の脳裏に昨日の光景がフラッシュバックする。  
まさか、今日も明菜が……………

がばっ

俺は咄嗟に身体を起こし、身構える。  
ベッドの中には……………誰もいない。

ほっ。まあ、そりゃそうか。昨日の夜はきつちり玄関の力を閉めて寝たし。

俺はパジャマからジャージに着替えると、リビングへと降りる。

がちゃ、とリビングのドアを開けると……………

「あ、おはよう。悠也」

俺はドアを開けたまま固まっちゃった。

え？　なんで、美優がここにいるの？

「ああ、おはよう」

俺は条件反射的に朝のあいさつをかえすが……………って

違う違う違う！

「って美優！？　何でいるの！？」

「何よ、いちや悪い？」

「いやいやいや、そもそもどうやって入ったのさ！」

「え？　二階の洗面所の窓があいてたから、雨どいを上って……………」

アンタはこのアクションスターだ……………というつつこみをぐっとこらえて、ひとまず落ち着く。

俺はリビングのテーブルについて、ふと美優を見やる。

「……………！！」

なんとというか、髪をひとまとめに後ろでくくって、制服の上からエプロンをつけている美優は、何というか、と、とても……………か、可愛い。

「？　何？　ジロジロ見て」

「！　い、いや、何でもないよ」

まさか、エプロン姿に見とれてました。とは言えない。

「？ 変なの」

美優はそう言いつつ、テーブルの上に料理を次々と運んでくれる。

白いご飯に、味噌汁。塩じゃけ、だしまきたまご。ザ・日本の朝食といった感じだ。

いいなあ。やっぱり朝ご飯は和食に限るよね。

そう思いつつ、だし巻き卵をパクリ。

「！ 美優……………」

「え、もしかして不味かつ、た…………？」

俺が食べる様子をじっと見つめていた美優は、不安そうに上目遣いで訊いてきた。

いや、これは……

「すっつげえ、うまい！！ 一年前よりうまい！ 料理、うまくなつたなあ、美優」

「そ、そっか。よかった。…………私の料理の味、覚えててくれたんだ」

「？ 何か言ったか？」

後半何やらブツブツと呟いたように聞こえたんだが……

「うんうん！ 何も言っていないよ！」

「…………そう」

うん、やっぱりうめえ！ ごはんをがつつ食う俺をみて、美優は

何故か嬉しそうな表情でお茶を飲んでいた。

「将来、いい嫁さんになるな、美優は」

「ぶっふおっ！」

俺が唐突に思ったことを言うと、美優は飲んでいたお茶を盛大に吹いた。心なしかかおもほんのり桜色に染まっている。

「ゲホゲホッ、何すんのよ！」

「いや、まるつきりコツチの台詞なんだが……」

俺は顔にかかったお茶をティッシュペーパーで吹く。口の周りのお茶はペロツと舐める。と。

美優の顔が盛大に赤く染まっていた。

「お、おい。どうした？ 大丈夫か？」

「あんたのせいよ」

美優はそう言ってテーブルに突っ伏してしまう。

とりあえず、俺は制服に着替えに二階に上った。

着替えて降りていくと、美優は復活していた。

「もう、大丈夫なのか？」

「……………大丈夫」

そう言つと、俺の前に風呂敷で包まれた、箱状のものを差し出した。  
てきた。

「はい。お弁当」

そっぽ向いて頬を染めて、手渡される。

「あ、ありがとう……………」

「つていうか。さっきも思ったんだけど、美優は朝飯食わないの？」

「え？ 私はもう食べたわよ」

ということとは、美優は俺の朝飯と弁当をつくるために、朝早くから俺の家に来たってこと……………

「美優……………」

「……………何よ」

「……………ありがとう」

「……………」

走れ！ 俺

高校二年が始まって、一週間が過ぎた。  
桜は今だ咲き誇っている。

段々とこの学校にも慣れてきたかな、と思い始めていた。

「あれ？」

昼休み終了五分前。

二年B組の教室のドアに手を掛けると、ふと違和感がある。

見上げると、そこには三年B組の文字が書かれた札が。

「ああ、またか……」

俺は思わず肩を落として呟いてしまう。

この学校、なぜか、一年生が一階。二年生が三階。三年生が二階。  
という、ちよつと複雑な教室配置になっている。

俺はいまだに慣れなくて、よく三年生の二階の教室に向かおうと  
してしまうのだ。

まあ、教室に入る直前に気付いてよかった。

俺は踵を返して階段の方へと向かう。



二階の階段の前は、少し大きめのスペースになっていて、コミュニティスペースとなっている。お昼をここで食べるもよし、友達としゃべるもよし。時たま、学年のイベントで使われることもあるようだ。

まあ、今は授業開始まで僅かしか時間がないし、人の姿はみられないが……ん？

そのコミュニティ広場の奥の方、左側が、少し窪んだスペースになっていて、ここからは見えにくいけど、そこだけ明かりがついている？

普段このスペースは消灯されていて、昼休みの間は付いている。一応最後の人が消すことにはなっているのだが……

でも、全部電気がつけっぱなしならともかく、そこだけ電気がついているのはおかしい。スイッチの場所は同じところなのに……

俺は気になってそのスペースを覗いてみることにした。

壁伝いにそっと覗いてみると、

「……」

俺は一瞬、驚いた後、すぐさま駆け寄った。

スペースの奥の壁に、人が寄りかかって座り込んでいた。

茶髪のウェーブヘアに、すらっとした手足の女生徒。

駆け寄って、しゃがんで顔をのぞきこむと、顔は青ざめ、汗がに

じんで、呼吸が荒い。

「大丈夫ですか!？」

俺は右の肩をつかんで軽くゆするようにして、半ば叫ぶようにして、訊く。

「大……………丈、夫……………」

彼女は弱弱い声で、そう呟くのがやつのようだった。  
どう見ても、大丈夫のようには見えない。

保健室。確か場所は……………一階の西の端      ここは東の端に近いから、ちょうど正反対の場所か

この様子だとけっこう切羽詰まってる感じた。急がないと俺は彼女の体を一度持ち上げ、自らは背を向けると、背中に乗せるようにして、立ち上がる。

おんぶした後はひたすら走る。

廊下だろうと階段だろうとひたすら走る。

それにしても……………この人、軽すぎないか……………？

俺より少し低いぐらいなのに……………俺の身長が173センチだから168センチぐらいだろうと思う。それなのに、背負っているのが感じられないぐらい、羽のように軽い。

一階の廊下を、全力疾走した俺は、保健室のドアを開け放つ。

「先生！」

なんたることか、こんな時に限って保健の先生は不在である。

とりあえず、俺はベッドに寝かして、布団をかける。

が、荒い息が収まらない。やきもきしながら見ていることしかできないう俺だったが、ふと彼女の喉元から、ヒュー、ヒューと音が漏れているのが聞こえる。

この症状……………

「ぜんそく  
喘息か！」

俺は急いで、近くにあった薬箱をあさり始める。

ぜんそくの薬の細かいことはわからない。けど、必ずある薬でなんとか……………

「あつた！」

せきどめ錠。市販の薬でも、一時しのぎぐらいにはなるはず……………

俺はコップに水を汲み、彼女のもとへ持っていく。

「つらいかもしれませんが、飲んで下さい」

俺は彼女の体を右手で起こすようにして錠剤を口にふくませる。そしてコップを口に近付けて、少しずつ、注ぐようにする。

どうやら、飲んでくれたようで、とりあえずこれで一安心だ。三十分もすれば、息もおさまるだろう。

さっきはあせっていて気付かなかったが、このベッド、上半身の角度を調節できるようで、俺は角度を三十度ぐらいにしておいた。

はあ、疲れた。そりゃそうか。人一人背負って、猛ダッシュしたんだから。

それにしても……………改めてみると、この人、すっげえ綺麗だ。線が細くて、まつ毛長くて、色が白くて……………って変態見たいだな、俺。

でも、妙と言えば妙である。なんでこの人、あんな場所で苦しんでたんだろう。それに、あそこにいれば、誰か見ているはずである。

……………まあ、考えても仕方ない。

「あら？　だれかいるの？」

ガラガラと音がして、保健の先生が入ってくる。  
若い女性の先生。

「えっと、二年B組の小日向悠也、と言います。実は……………」

俺はあったことを、そのまま話した。

その先生は時折、びっくりしたような表情で俺の話を聞いていた。

「そう……ありがとう」

「いえ………」

「彼女……中島綾乃さんというのだけど、ぜんそく持ちで体が弱くて、よくここにくるのよ。でも、喘息の常備薬はもってるはずなんだけど………」

そう、だったのか。大変だな、体が弱いのに、学校に通うというのは。

「それにしても、よく知ってたわね。せき止めの薬が、喘息に効くって」

「ああ、俺も……小さいころ、喘息にはだいぶ悩まされましたから。今ではもうほとんどおさまっているんですが………」

俺自身、喘息持ちで、小さい頃は本当に風邪をひくと、せきがとまらなくて、滅茶苦茶苦しい想いをした経験がある。

病院でやる「吸引」もすっげえ苦いし………」

「じゃあ、俺はこれで。授業がありますし」

「ええ。本当にありがとうね」

俺はそういつて保健室を後にした。

映画と買い物っはデートの定番です

とある日曜の昼。

駅前の広場は日曜といえども、行き交う人であふれていた。

四月。春と言ってもまだまだ肌寒い。

行き交う人の中には、コートの前を抱いて、せかせかと先を急ぐ人も見受けられた。

駅舎の柱によりかかっていると、

「悠也〜！」

待ち人来たり。

美優は少し小走り気味にこちらに駆け寄ってくる。

今日は、以前美優と約束した、映画と買い物の日。

家が近いのだから、別に近くで待ち合わせてもよかったのだが、美優の強い希望によってここでの待ち合わせになった。

「おう。美優、おはよ……」

振り返って挨拶しようとした俺は思わず言葉を切って、美優をじっと凝視してしまう。

「……………？ 悠也？」

「……………！ ああ、ごめんごめん。おはよう美優」

びっくりした。今日の美優は白いワンピースに赤いリボンをつけて、なんか……似合ってるってのもあるけど………すごく可愛い。

思っても言えないけど、美優は一年前よりずっと可愛く、綺麗になった。

嵐山さんたちの話では学校でもかなり告白されているようだ。

いつか、美優も誰かと付き合っただろうか？  
それは………寂しいものがあるな。

「えっと……待った？ 悠也。ごめんね」  
「いや、全然。今来たところ」

本当は15分前には着いていたのだが、まあわざわざそれを言うこともない。

「……ふふつ、ありがとう」

……… 美優には見抜かれてるっばいけど。

美優と並んで駅から歩いて20分ほどの大きなショッピングモ―



ル内にある映画館は、日曜と言うこともあって結構な人であふれていた。

薄暗い、ちょっと変わったにおいがする映画館のロビーに入っていくと、

「見る映画って決めてるの？」

美優がそう聞いてきた。

「いや、当日美優の希望を聞いて決めようと思って」「うん。でも……………」

俺と美優が好む映画のジャンルはかなり異なる。

俺はアクション系

美優はファンタジー系が好きだ。

どうしようか……………」

そんなことを考えていると、ふとある看板広告が目に入った。

『遂に日本上陸！ 米で一大旋風を巻き起こしたファンタジーサスペンスアクションラブストーリー！』

「ねえ美優……………」

「ん？」

俺の視線の先を美優も追っかけてその広告を見つける。

そして、2人してきつと微妙な表情になっているだろう。

「……………」

「……………」

言いたいことは色々あるが、とりあえず面白いのだろうか。

「どうする？ 美優」

「うーん……………他に面白そうなものないし、あれにしようか」

まあ、ひよっとしたら当たりかもだしな。

「高校生2枚下さい」

「2400円になります」

チケットを2枚受け取って1枚を美優に渡す。

「奢り？」

「当然」

こういつ時ぐらいは格好付けたいしな。

映画の上映場は少し肌寒かった。軽く冷房が効いてるかもしれない。少し厚着気味の俺で肌寒いんだから、美優は……

と思つて隣を見ると、予想通り肩を抱くようにしていた。

俺は自分のコートを脱いで、美優の肩にかぶせる。

「！」

少し驚いたような顔をした美優も次にはコートの袖に腕を通していた。

「……ありがとう」

消え入りそうな声だったがそう言ったのは間違いなかった。

「面白かった」

「ああ。ちよつと想定外に面白かった」

ショッピングモールの一角。喫茶店に俺と美優は着いていた。なお、美優は俺のコートが気に入ったらしく、顔をうずめるようにして着ている。

映画はそれぞれの要素が互いに良さを出し合い、思いの外面白い仕上がりとなっていた。

大当たりである。

「ホットサンド、お待たせいたしました」

店員さんが料理を運んで来てくれる。

「……………美優。ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「……………？ 何？」

俺はずつと気になっていた先日の保健室エスケープ事件を美優に説明した。

「はあ。なんであんたはそんなトラブルに巻き込まれやすいのよ」  
「うつ……………そんなこと言われても」

美優は俺の話を聞くと、苦笑いしながらそんな事を言った。

そして、ふうと一つため息をつく、少し真剣な顔になって言った。

「中島綾乃さん。2年C組。私たちと同じ学年よ。」

「同じ学年……………」

「うん。それでね……………中島さん、私たちより一つ年上なんだよ」

「…………え、留年してるってこと?」

「そう。彼女、あんな感じで病気がちでしょ。出席足りなかったみたい」

そうか。そんな事情があったのか。

「それで、どうやら中島さん。あんまりクラスに馴染めてないみたい」

分かる気がするな。クラスの方は自分より1個年上の人との接し方に戸惑っているのだろう。

でも、まだ4月だし、これから状況はいくらでも改善されるだろう。

「ん……………ありがとう、美優」

俺は美優にお礼を言うと、立ち上がった。

「じゃ、買い物に行くか!」

「うん!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9964v/>

---

恋愛生活

2011年11月11日04時42分発行